

1984.11.30

人物 朝鮮音楽界の父

金

仁

湜

(一八八五
一九六二)

朝鮮の近代開化期において西洋音楽の導入過程で大きな業績を残した人物に

金仁湜がいる。

彼は、一八八五年九月一

九日平安道江西郡で生まれた。幼い頃に平壤に移り、そこで育った。商人の叔父が「甲午農民戦争(一八九四年)」の時に嫌疑をかけられ逮捕されたが、キリスト教徒であつたので放免された事があり、彼はそれを動機にキリスト教に興味を持ち、教会に通い始めた。そして、教会での西洋人宣教師のオルガンや讃美歌に魅せられて、西洋音楽に没頭して、このことになった。これは、平壤がキリスト教の宣教が盛んである事による。彼は、十一歳の時から平壌の崇徳学校に入塾して唱歌を熱心に歌った。崇徳中学校に進み、宣教師として教鞭を取つてから、当時の生徒には

の妻であるホント夫人とスヌウク女史(正義女学)の後、崇徳専門学校に入學した。彼は、宣教師を持っていた古いオルガンを欲しくなり、友人四人で十二円もの金を出し合ひ、やがてモラフタ。彼がそのオルガンを毎日、寄宿舎であまりに熱心にひくので、他の学生から苦情が出たほどであった。また、バイオリンを独習したが、バイオリンをはじめて三日後に崇徳学校の復興会(新精神会)で見事なバイオリン独奏をしてみんな驚かしたというエピソードもある。

教育者としての業績

崇徳専門学校三年を卒業した金仁湜は、英語の勉強のため米国留学の志を抱いてソウルに上った。(一九〇七年二二九)その当時、国運が傾いた危機意識と近代化権力を進めようと多くの私立学校が設立された。新式教育として唱歌を科目に入れたが、教師不足であった。結局、彼は、朝鮮最初の音樂教師となつた。皇城基督新、培材学堂などでも音樂を教えた。そして、調陽俱樂部(注)でも一九一一年九月から西洋樂器師として教鞭を取つてから、当時の生徒には

李尚俊、洪蘭媛（バイオリニスト）などの有名な音楽家になつた人もいた。また、彼は、YMCA内に合唱団を組織した。最初は男性合唱から出発し、混声合唱に發展させ、「京城讚揚隊」と呼ばれた。

『詠詞、作曲活動』

彼は、教員で、歌けんなクリスチヤンであった（プロテスタントであるが、老いた後、カトリックに帰依し、最後は天主教）で讃美歌を多く翻訳している。その数は、一八〇曲余りとのことである。

彼は、作曲も多くした。二〇代の時、一九〇五年に平壌の西内外小学校で連合運動会が開催された時に「学徒歌」を作詞、作曲して歌われた。これが、朝鮮人として最初に作曲した唱歌と言われる。彼は、「漂母歌」（川辺で洗濯する女）、「父母恩讐歌」なども作曲している。また、一九〇八年三月に進明学校創立記念の式典のために愛國歌といふ題目で作詞、作曲をしてある。一九一〇年には平壌で李聖植が発刊した「朝鮮唱歌集」は愛國的で民族意識をあらわす理由で日帝から發表禁止されたが、その中に「前進歌」、「國旗歌」など金仁湜の作品も何曲かあつた。

彼は、それ以外にも「蘆山會相」、『民樂會』の朝鮮僑胞の古典音楽の採譜という作業にも情熱

を燃した。調陽俱樂部の後身である朝鮮正樂会習所の編集委員会事業として金仁湜が開発したものであり、金仁湜編著による「蘆山會相」（洋琴譜）は、一九一四年三月に初版が出た。この五線譜への採譜は、彼の大きな功績である。

彼は、一九三二年には朝鮮音楽家協会から後輩である李尚俊と共に二〇年勲綬功劳賞の表彰を受けている。洋樂導入期にめざましい活躍をした金仁湜であつたが、从此以後は、細々とした音楽活動であつたようである。解放以後、京畿道広州郡の片田舎で休養していた時、朝鮮戦争が起つた。彼は、自分の作品を土の中に埋めて避難したが、後になつて戻り掘つてみたが全くで腐つてしまつた。晩年は、太極に住んでいたが、一九六一年二月十七日に七五歳でこの世を去つた。彼が六十歳で引退して数年絶命死ではあつたが、見送る人も少なく、彼の功績の割りにはみすぼらしく葬式であったといふ。

（注1）もくげ通信八三号（史片参照）

四七号（史片参照）

参考文献：李宥善著『韓國洋樂八十史』

（了）李相萬著『韓國音樂研究』（大韓金仁湜

）

（山根俊郎）